

幼児の夢 (一)

葛原しげる

幼児が、近ごろ、テレビで、さまざまの歌謡を、童謡でないのに、見ながら聞き、聞きながら見て、よく覚えていっているのに、実は、驚かされる。コマ・シャルソングに至っては、名のある歌手たちが、まことに印象深く、身振、手振、足振、腰振りも大げさに……物を、真正面から見せては、繰返し歌うから、まことにもって、幼児にも、よく覚えられる。それらの中には、肩を、ひそめさせられるようなものは、幸にして、多くはないようであるが、しかし、決して好ましい歌曲ばかりではないようである。先日、児童芸能の縁故者五十名ばかりの或る会合に列する機会があって、皆、次々の自己紹介に、何かの感想を付言する事であったが、その大多数の感想は、

「近年、年々、童謡が、下火になるのはどうしたことか」

というのであった。

大正時代、童謡の隆昌につれて、今に愛唱されている名作の多くが創作されたのであるが、当時、中には、きわめて感傷的なものや、芸術的であるあまりに、少なくとも児童には難解なものも次々に、もてはやされるのに驚いて、私共少数のものは、あくまで、子ども向きにと、平明と単純とをモットーとし、所謂「ニコニコペンビン」主義の童謡をこそと、むきになり、声を大にして、雑誌『日本童謡』を月刊し「ニコペン子供会」「あうむ子供会」「ポッポ子供会」などの名を替え替え、健全な童話や、童謡の発表普及に一生懸命になった数年間もあつたが、幸にして、昭和も半ば頃からは「お涙頂戴」ものは、影を、ひそめたので、それを悦んだのは、私共少数のものばかりではなかつたことは、思い出してもありがたい。ところが、大戦後は、ジャズめいた童謡、それも、幼児向きのものは稀で、おとなのおもちゃめくものが、かなり発表されているのではないか。

しかし、あえて童謡といわず、明治時代

からの「幼稚園唱歌」や「小学唱歌」の中の、善いものは、古くてもやはり善いので、その後の新作童謡の多くの中の善いものと共に、また、若干の新作と共にラジオでも、レコードでも、また稀ではあるが、テレビでもよい児童唱歌や、善い童謡が、演奏されていることを、よろこぶ。

しかし、一体どうして童謡が下火なのであろうか。それには相当の原因も理由もあることながら、その一つには、童謡作者(作詞者、作曲者)の、怠慢でなければ、熱誠不足ではあるまいかと、私自ら反省している。しかし、需要供給の関係と、発表ルート(の壁が、簡単には破れない堅固さと厚さ)とが、重なっている現状である。

これは、童謡についても、この頃、童話人仲間、しきりに話題になっているところであるだけに、今こそ、共に、曲角に立っているともいふべきか。したがって、童話人と同じく、童謡人も、新発足すべき絶好のチャンスではないのか。

とまれ、子ども、特に、幼児は、うた好

き、はなし好きである。その「うた」と「はなし」とによって、まず、幼児の夢を、と祈らずにはいられない。しかるに、今こそ、科学の時代であり、宇宙の時代であるために、ともすれば「夢」は「現実」によって破壊されるのが、おとなの社会ばかりではない事実を、しっかり、はっきり見きわめ、見とどけて、大地をしっかりと踏みしめて、子どものことに、はたらくおとなわれらは目を、耳を、敏にして、しかも、健やかに起ち上らなくてはならないことを感ずる。

折柄、近ごろ、保育所や、幼稚園から、次々に、そのうたの作詞を頼まれるままに拙作を続けているうちに、痛感するところ切なるものあり、幼児に、夢をもたせるうたとしたいと、つとめてみている。

由来、国に国歌があり、学校に校歌、会社に社歌がある。工場にも工場歌があり、郷土には、郷土の特色を宣伝する音頭や小唄がある。みな、自分のうたとして誇を以て愛唱するのであるが、この歌謡ばやりの現代であるのに、いまだ園歌のない幼稚園

また保育所が、少なくないことを、かなしむ。つまりは、俗悪な歌謡の代りに「僕のうた」、「わたしのうた」としての園歌の類を提供して、愛唱させて、いわゆる「俗悪」から救ってやるのが、われらおとなの責務ではないのか、と、いささか奮い起つ気持ち呼びさまされている。以下、きわめて拙作ながら、一、二の例について、所信を述べてみる。

竹尋保育所のうた

ここ竹尋は、農村で、この保育所の保育方針は、

「強く」「正しく」「愛らしく」の三項目である。そして、近くに、権現山（みこがね）というのがあり、竹田川（たけのたにがわ）というのがある。

そして、運動場のほとりは、田圃であり、路傍には、草花も咲き、また、保育所の屋根には、小鳥も来てとまる上、小鳥の家も新設することになったときいて、まとめたもの。

一、いつでも 高くても 大きくても

雨にも 風にも つよい山

権現山こそ つよい山

見上げて 皆が つよくなる

竹尋保育所 うれしいな

二、わきみち それずに 一すじに

とおくの海まで 注ぐ水

正しく流れる竹田川

みんなも 正しい子どもだけ

竹尋保育所 うれしいな

三、かわいい 小鳥と 仲よしで

かわいい草花 大すきで

竹田と八尋の よい子ども

かわいい子どもばっかりの

竹尋保育所 うれしいな

実は、これは、瀬戸内海から、十何キロも離れた私の生まれ故郷ので、「竹尋」とは「竹田」と「八尋」と二つの部落を合併して、新しい名の村にしたもの、それが、先年、町村合併で、「神辺町（かみべまち）」になった。町

といつても、やはり農村で、権現山は村一の高い山ながら、標高僅かに、百何十米、しかし、やや富士形の山らしい山であり、近郷からも目につくので、私自らも、幼時から、見上げては、時々湧く雲をふしぎがたりした。そして、本ものの富士山ではなくても、凜とした姿が頼もしかったので、別の「竹尋音頭」では、

雨でも 風でも すつきりと

立った男の晴れ姿

とほめておいた。また竹田川の小さい流れながら、その川土手が、村道になつていて蜿蜒一里あまり、歩いて歩いても、家もなく、木立もなくて、つまらなくて、誰でも、馬鹿らしくなり、阿房らしくなるので、昔から「馬鹿土手」と呼んだり、「阿房土手」と悲しげまにいう。それで「竹尋音頭」では、これも、ほめておいた。

誰が名付けた 馬鹿土手一里

春は 土筆とり 夏は 螢狩

秋冬 さらさら 瀬音も澄んで

帯になる／＼襷になる／＼竹田川

この結句は「帯に短かし 襷に長し」の、じれったき、歯がゆきでなく、役に立つ竹田川なのであると、ほめたわけ。

しかし、これ位では、子どもの夢を、何というほどのことも、いまだ、よく叶えられそうもないので、我ながら、じれったくて、歯がゆくて、情けなくてならなかったので、次では、思いきってみた。

阿部幼稚園々歌

これは、東京都も旧市内、本郷の中央ながら、丸山台ともいわれる高台、小石川方面を見わたして、坂の上、西はるかに富士山がよく見えて、朝夕、晴れやかなこと、いうばかりなく、一名「学者町」ともいわれた西片町、むかし、備後福山の藩主阿部家の下屋敷の跡で十番地ひとつで、六百何十戸、一千二百何十世帯の静かな住宅地、その一劃に、五年前、もとの伯爵、雲の研究で世界的の学者である阿部正直理学博士が、時世に感ずるところあって開設、鎌倉の自宅から通勤して、幼児と共に砂にまみ

れて自ら園長たる幼稚園、ことしが創立五周年にあたる記念にとて、園歌を制定するのになその作詞を依頼されたのであるが、園長が、科学者でもあるからばかりでなく、科学の時代、宇宙時代の現時、幼児といえども、目前の花や、小鳥ばかりを、観察の対照としていたのでは困るので、少しく、工夫をこらすことにしたのである。

即ち、富士山は、日本一の霊峰であり、日本人すべての憧れでもあり、誇りでもある。その上、世界的に「フジヤマ」の名も高く、万国人が憧れて来る山でもある。その雲表高く聳えている頂上こそは、星の世界から、下りて来るには、何よりも脚場になるであろうし、とりわけ、四方八方に拡がっているその裾野こそは、日本一の大運動場、何千、何万、何千万もの、星の世界の子どもたちが、大大大の大運動会として、歌って踊って大よろこびするのに、ふさわしいのではあるまいか。

そうした裾野を拡げている富士山が、よく見える幼稚園、阿部幼稚園よ、僕たちの幼稚園は、わたくしたちの幼稚園は、と、

うれしいことなのである。それを第一節にして、

高くて 大きい富士山の

すその 一ぱいに 下りてきて

歌って 踊って いるでしょう

星の世界の 子どもたち

富士山 いつでも よく見える

阿部幼稚園 うれしいな

とはしたものの、実は、東京都の内外から、その富士山も、そう毎日、よく見えないのは事実である。ところで、見えなくても、

「今日は、見えませんね」

といいながらも、いつも見える方向を見つめさせては、また、大屋根続きの都の屋根の波の上に、また、雲の中に、あの、すつきりした形の富士山の、立派な姿を、想像させ、見るように思い出させては、幼児の時代から、

「高く、大きく——立派に」

と、憧れさすことは、幼児の一生にとって何物かの種子を、植えてやることに、

ならないでもなろうか。昔、上海に在る日本高等女学校の校章が、桜の花であったので、それと共に、目には見えない富士山を、歌い込んで、日本人たるの自覚を深からしめようとしたことがある。心のカメラに、霊峰富士の、気高い姿を、映像としても、やきつけさすことが出来れば、と、念じてのことであった。そうして、少女の純真なる心象に、うつしつけられたる気高い姿の、母国日本のシンボル富士山こそは、その一生に、何物かを植えたに相違ない。そうした少女時代でなく、幼時、機会のあるごとに「富士山」を意識させることは「夢」以上の何物かであることを信ずる。「夢」以外の或る物を与えることであると信ずる。幸にして、この幼稚園は、都心にありながら、その富士山と親しめるのである。よし、遠くても、また、よし、毎日は見えなくても「わがもの」として、親しむことが出来るのである。その富士山の、広いひろい裾野一ぱいに、拡がり拡がって、大星小屋満天無数の星の世界から、星の子どもたちが賑やかに下りてきて、賑やかに遊

んでいるであろうと想像することは、実に、楽しいではござりませんか——それを、もし、絵にするならば、その星の子どもたちは、どんな帽子をかぶり、どんな服を着、また、どんな靴をはいた子どもたちを描くべきでしょうか、東京の、日本の、僕たち、わたくしたちと同じ帽子、同じ服、同じ靴でしょうか。それとも、いつか、何かの絵本で見たかもしれない火星人間の小さいみたいなのでしょうか。その火星人の帽子、火星人の服、火星人の靴は、ほんとうに、どんなのでしたっけ。

もし、それを、幼児に、思い思いにかかせてみると、実に愉快な星の世界の子どもが、かけるに相違ない。そこに、幼児の夢が、うかがえる。一体幼児は、身辺の無生物でもが、すべて、自分と同じ生活をしていると信じているのだから、きつと、星の世界にも、自分たちと、何事も同じ子どもが、お友達が、と信じているであろうし、従って全然、異様な帽子や、異様な服や、異様な靴は、想像もしないであろうか。(おもしろしおもしろしではござりませんか。)

さて、第二節には、阿部幼稚園のバッジが兎の耳長さんであるから、そして、兎のお友達は、昔の昔の大昔の、そのまた昔も昔、大大昔から、お月様の中で、たしかにお餅をついているのであるから、いるに相違ないから、僕たち、わたくし達の所へ、遊びに来てくれよと、電報を打って、呼びよせようというのである。

「何と云って電報うつのか」

「ここにも、お仲間の兎ちゃんがいるから遊びに、下りていらっしやいって」

「お月さまの兎ちゃん、僕たちのいうごとく、よく、分る——」

「ほんとほんと。こここの兎ちゃんだつて、何と云ってても、いつも、返事をしないものネ」

「そうよそうよ。わたくしたちのことばが分らないんだもん」

「じゃ、この兎ちゃんに、たのむといい。兎ちゃんのことばで、よんで貰うのさ」

「兎公に頼むのかい。兎公に——」

「そうよ、頼むのよ。頼まなくちゃ——」

「いやだ。兎公なんか頼むの——」

「だめよ。そんなに、いばつたつて。この兎さん達、きつと、平生、皆のこと、悪口いつていても、私達には分らないのよ。兎のことばですもの」

「そうねえ、兎は兎ことばね。松の木や桜の木は、木のことば。お花は、花のことばで、話し合ってるのかしら」

「そうサ、僕たち、人間には聞えないだけサ」

「あら、ほんと」

「ほんとサ。」

推理めく想像も、ここまで発展すると、幼児といえども「欠乏、要求が發明発見の源」たることを、理屈なしに直感して、何事か、カチンと、感じとり、思いつき、成人後に、伸び出す何かの苗の種子を、植えつけられることにならないものか——あえて、夢とは申すまじくも……。

かくて、その第二節は、

皆みなの伸のびよし 兎さん

はやく 空から 呼んどいで

月の世界のお友だち

兎ことばの電報で。

兎のバッジが大好きで

阿部幼稚園 うれしいな

昔、文福茶釜に手が生え足が生え、綱渡りするのを、非難した学者があった。しかし、子どもの世界でなくても、芸術と、科学とは、おとなの世界において「真」の探求において一つであり、相通する一すじの道の両端において、それぞれの分野で、存在している。特に、幼児は、可愛いがつているお人形に、自分のおやつを、分けて、たべさせろ。芸術は、大自然を母胎とする。人間のうち、幼児こそは、生まれながらの、「自然」である。その一言一行こそは、実に、聖なる芸術的表現である。幼児の夢にこそは、実に、おとなわれらへの、大きな示唆があるのである。その夢に、少しでも力の添えが出来るならば、幼児の世界に、明暮、目を、耳を、大きく開いているおとなわれらの生き甲斐があるといふべきものか。否、光栄であり、実は、悲願であるのである。

(昭和36・5・20)